

目 次

1. 各専攻・講座の教育・活動報告

看護学専攻・看護学専攻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

医療技術学専攻 医用量子科学講座・放射線技術科学専攻・・・・・・・・ 6

医療技術学専攻 病態解析学講座・検査技術科学専攻・・・・・・・・ 15

リハビリテーション療法学専攻 理学療法学講座・理学療法学専攻・・・・ 27

リハビリテーション療法学専攻 作業療法学講座・作業療法学専攻・・・・ 32

2. 公開講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

看護学専攻・看護学専攻（平成28年度）

大学には「知」の創出と人材育成において社会的役割を果たすことが強く求められている中で、とりわけ本学では世界屈指の研究大学になることを目標として掲げている。

看護学専攻では、看護学の発展に寄与する教育・研究活動を目指して、教員それぞれが主要な研究課題を遂行するとともに、国内外の学会等での研究成果の報告、トップジャーナルへの論文掲載に向けて取り組み、平成28年度は査読を有する英文論文数は大幅な増加を認めた。

若手研究者の育成においては、後述のリーディング大学院の推進、韓国の延世大学との学術交流にタイ王国・チュラロンコン大学も加わる新たな取り組みを行った。また、学部学生の大学院進学や国際的活動への関心を高める教育環境の整備として、大学院生との交流や短期交換留学の充実に努めた。

さらに、博士課程（後期課程）の学位授与率の向上を目指して、拡大大学院委員会を開催して、学位審査の手順等について情報共有と意識改革に取り組んだ。また、大幸キャンパスで行ってきた大学院説明会に加えて、本学医学部附属病院看護部・看護キャリア支援室との協働で行う附属病院職員対象の大学院説明会を継続し、優秀な人材確保に努めた。

これらの教育研究活動の基盤となる学部教育の充実のために、カリキュラム改訂に向けたワーキンググループの活動を継続するとともに、看護教育の将来像を描きながら3年次編入学制度の見直しと助産教育の大学院化についても議論を重ねた。

併せて、教育の受け手である学生が抱えている問題の把握と、指導教員を中心とするきめ細やかな個別対応に努めた。

1. 運営

1) 組織構成

平成24年4月の大学院講座化以降、基本的な組織は2講座制（基礎・臨床看護学講座、健康発達看護学講座）で、大学院教育等の運営にあたってきた。また、兼務の学部教育は、4領域体制で対応し、基礎看護学9名、臨床看護学10名（うち年度内退職3名、後任教員着任2名）、発達看護学8名（うち年度内退職1名、育休後復職1名）、地域・在宅看護7名の計34名の教員構成であり、特任准教授（名古屋大学がんプロフェSSIONAL養成プラン）1名とともに、教育研究活動に当たった。

2) 運営状況

看護学専攻では、看護学専攻教授会（毎月1回、必要に応じて臨時開催）、全教員による看護学専攻会議（毎月1回）を定例開催し、専攻の運営方針、委員会活動、日常の諸問題等への対応を行った。また、大学院委員会（毎月1回）を始め、各委員会

の活動を通して、専攻内の教育研究活動のより円滑な運営と課題の抽出に取り組んだ。

3) 医学部附属病院との連携

医学部附属病院看護部，看護学専攻，看護キャリア支援室の協力体制によりユニフィケーション委員会を定例開催し（毎月1回），看護教育の協働に関する各役割と連携の調整を行った。また，年に2回開催する看護専門委員会では看護部（看護部長，看護副部長，看護師長等），看護キャリア支援室，看護学専攻全教員が一堂に会して，実習等の現状と課題を共有し，うち1回は看護部との合同FDを同日開催し，実習指導能力の向上にも努めた。

2. 教育活動

1) 学生について

学部：平成28年4月には新入生8583名（女子7名，男子8名）が入学した。また，平成28年3月には，看護学専攻82名（編入生5名を含む）が卒業した。

大学院：平成27年4月には博士課程（前期課程）13名（基礎・臨床看護学分野6名，健康発達看護学分野7名），博士課程（後期課程）7名（基礎・臨床看護学分野4名，健康発達看護学分野3名）が入学した。また，平成28年度には，博士課程（前期課程）16名（基礎・臨床看護学分野9名，健康発達看護学分野7名），博士課程（後期課程）4名（基礎・臨床看護学分野1名，健康発達看護学分野3名）が修了した。

2) ガイダンス

平成28年4月3～7日に学部新入生（1年生，編入生），新2～4年生，大学院新入生（前期・後期課程）に対して専攻共通・専攻別ガイダンスを行った。学習（修）計画，学生生活，感染対策，図書，情報，ハラスメント関係等，一部に倫理審査，国試・就職等に関するガイダンスを行った。

3) カリキュラム・資格等

学部：3年次4月に保健師・助産師各選抜試験を行い，保健師選抜は15名，助産師選抜は8名が合格し教育の充実に努めた。平成29年2月に保健師15名，助産師6名が，また看護師は77名が国家試験を受験し，全員が合格した。

大学院：看護学専攻博士課程（前期課程）のがん看護専門看護師（CNS）コースは，38単位カリキュラムに移行して教育のさらなる充実に努めた。小児看護CNSコースは26単位カリキュラムを継続し，今後単位数の変更を含めて対応を検討する。平成28年4月入学者は小児看護CNS1名，平成29年3月修了者はがん看護CNS1名，小

児看護 CNS は 1 名であった。

リーディング大学院“ウエルビーイング in アジア実現のための女性リーダー育成プログラム”は 3 年目となり、平成 29 年 3 月には看護学専攻から第二期履修生 2 名が前期課程（看護学専攻）を修了し、今後、同プログラムの履修生として後期課程への進学を予定している。

4) 国際交流

学部：平成 28 年度についても、日本学生支援機構「海外留学支援制度」からの補助金を獲得することができ、延世大学（2 名）、上海交通大学（2 名）、シンガポール国立大学（6 名：支援を受けたものは 4 名）が病院実習、授業や演習への参加などの短期交換留学（8～10 日間）を行った。海外からの学部生等の受入については、延世大学から 2 名、上海交通大学から 2 名、および、シンガポール国立大学から 5 名が来学し、約 1 週間の病院見学、授業への参加などのプログラムに参加した。ちなみに、これら留学生の受け入れに関しては、学生の国際交流ボランティアサークル SNUPY が中心となって、多くの学部生を巻き込んだ留学生との文化的交流が行われている。

大学院：名古屋大学-延世大学学術交流集会在 11 月 2～4 日に本学・大幸キャンパスで開催された。本年度は、このプログラムにタイ王国・チュラロンコン大学の教員と大学院生も加わり看護学専攻の学生 3 名を含む合計 8 名の大学院生の研究発表が行われた。来学者は、病院等の施設見学も行った。

5) 感染対策

保健学科感染対策委員会の方針に準じながら、看護学専攻における実習時期や内容に合わせて感染予防対策を行っている。専攻内感染対策委員会を中心に感染症抗体価検査の実施と結果の確認、ワクチン接種状況の把握、胸部レントゲン写真の結果の把握等に努め、各実習前にこれらの結果を病院の研修担当部門に報告している。また、実習中も学生に対して感染予防対策の徹底を図るとともに担当教員を中心に学生の健康状態の把握に努め、看護部や病院の感染部門と連携しながら、感染の予防や拡大を防ぐ活動を行っている。学内においても学生に対してガイダンス等で感染予防教育を行うとともに、インフルエンザワクチン接種の勧奨やインフルエンザの感染状況の把握に努めている。

3. 研究活動

看護学専攻教員は、各自主要な研究テーマに取り組み、科学研究費等の外部資金を得ながら研究活動をより遂行することに努めた。教授・准教授・講師による研究内容の一部を以下に示す。

- 太田 勝正 : 看護情報学・情報プライバシーに関する研究, 看護倫理・患者の尊厳に関する研究, タイにおける地域保健活動データベース構築のための研究, 放射線看護・放射線防護に関する研究
- 山内 豊明 : 看護実践におけるアセスメントの理論構築と実践的研究, 看護ケアについての評価システムならびにその指標の開発, 医療の質・安全ならびにマネジメントに関する研究, 医療専門職間の関係性ならびに相補性についての研究
- 藤本 悦子 : 看護技術の検証と開発, 睡眠・せん妄に関する研究, リンパ浮腫ケアに関する研究, 組織再生を促すドレッシング材の開発
- 本田 育美 : 慢性の病をもつ人の健康行動（セルフマネジメントや疾病管理）に関する研究, 高齢者のヘルスプロモーションに関する研究, 看護師の臨床推論に関する研究
- 大島 千佳 : 看護技術の検証と開発, 睡眠に関する研究, 血液およびリンパに関する研究
- 安藤 詳子 : がん性疼痛緩和に関する研究, 終末期看護に関する研究, がん患者の症状マネジメントに関する研究
- 大川 明子 : がん患者・家族への看護ケアの探求, 遠隔がん看護支援システムに関する研究, 補完・代替療法に関する研究
- 佐藤 一樹 : 緩和ケアの質評価方法の開発, ビッグデータを用いた終末期医療の実態調査, がん・非がん終末期の QOL や医療の質評価, 緩和ケアの提供体制に関する研究
- 池松 裕子 : 循環危機患者の自覚症状, クリティカルな患者の QOL, 発達障害のある看護学生の学習支援プログラム開発
- 中山 奈津紀 : 循環器疾患患者の生活支援に関する研究, 周術期におけるせん妄に関する研究, 運動と血液循環に関する研究, シミュレーション教育に関する研究
- 河野 由理 : 精神障がい患者の退院支援や地域ケアに関する研究, 児童・思春期の精神保健に関する研究, 精神看護の技術および評価に関する研究, 看護師のメンタルヘルスに関する研究
- 澁田 英津子 : 認知症高齢者のケアに関する研究, 認知症高齢者の介護者支援に関する研究, 高齢者ケアの教育方法と評価に関する研究
- 浅野 みどり : Special needs（一過性でない健康問題）をもつ子どもと家族の看護, 家族の価値観と強みを尊重した養育期の家族への予防的ケア : アレルギー疾患, 発達障がい, 多胎児育児など, 子ども家族の Well-being
- 奈良間 美保 : 子どもと家族主体の在宅ケアを支えるケアモデルと実践推進システムの開発
- 玉腰 浩司 : 生活習慣病に関する研究, 母子保健に関する研究, 婦人科疾患・周産

期疾患に関する研究

- 入山 茂美 : 母乳育児に関する研究, 産痛緩和ケアに関する研究, 思春期の若者の性行動に関する研究, 国際母子保健に関する研究
- 島 明子 : 女性のヘルスケアに関する研究, 中高年女性の更年期症状のケアに関する研究, 周産期ケアに関する研究
- 高橋 由紀 : 哺乳探索行動と母子相互作用に関する研究, Skin-to-skin contact に関する実証的研究
- 梶田 悦子 : 生活習慣病とライフスタイル, エビデンスに基づく保健師活動
- 榊原 久孝 : 生活習慣病の健康管理, 職場の保健管理, 物理的因子(振動)による健康影響
- 前川 厚子 : がんサバイバーの QOL と教育に関する研究, スキンケアと褥瘡管理に関する研究, ストーマ保有者の QOL と教育に関する研究, スキンケアと創傷管理に関する研究, ストーマ保有者の QOL と適応に関する研究, 訪問看護師のキャリア開発に関する研究, 炎症性腸疾患に関する研究, 看護・介護用品の開発と安全性に関する研究
- 林 登志雄 : 訪問看護と在宅医療の研究, 終末期の医療と看護の研究, 細胞老化と動脈硬化症の研究, 高齢者糖尿病コホート研究と治療ガイドライン作成, 遺伝性(家族性)高脂血症研究, 東アジア女性健康長寿研究
- 渡井 いずみ : 産業看護に関する研究, ワーク・ライフ・バランス支援に関する研究, 公衆衛生看護における家族支援に関する研究

4. 対外的活動

1) 国立大学保健医療学系代表者協議会

国立大学保健医療学系代表協議会が平成 28 年 6 月 6 日に, 同協議会看護学分会が同年 6 月 5 日に, いずれも弘前市で開催された。大学院後期課程における入学定員割れや, 大学院への外国人留学の入学試験等, 各大学で抱える課題について議論が行われた。

2) 日本看護系大学協議会総会

日本看護系大学協議会定時社員総会が, 平成 28 年 6 月 20 日に東京で開催され, 常任理事設置等の審議が行われた。

(主任: 奈良間 美保)

医療技術学専攻 医用量子科学講座・放射線技術科学専攻（平成28年度）

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育と研究の目標は、以下のとおりである。

- ・ さまざまな画像診断技術（CT, MRI, X線, 核医学装置, US など）の原理や特性を理解し、安全・確実に機器の能力を最大限発揮できるようにする。
- ・ 治療のため人体に的確に放射線を照射できるようにする。
- ・ 放射線が人体に及ぼす影響について幅広い知識と応用力を身につける。
- ・ 専門知識ばかりでなく豊かな人間性を合わせ持つ人材を育成する。
- ・ 日進月歩する医療分野の進歩を理解し、指導的立場となる医療技術者および放射線技術科学を学ぶ人々を指導する人材を育成する。
- ・ 自ら医療の進歩を創出し世界的な研究の一翼を担うことができる研究者を育成する。

1. 運営

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育に関するさまざまな問題、教育研究費の予算配分等の運営は、毎月1回の講座会議、並びに講座教授会の合議に基づいて行われている。

2. 教育活動

学部教育：

平成28年度の新入学生は、新1年生が41名、3年次編入者は1名であった。2年生は44名、3年生は42名（編入生1名を含む）、4年生は49名（編入生1名を含む）で、4年生は11名の教員のもと、それぞれの研究室で卒業研究を行った。また、3年生以下の学生も13名の教員が指導教員となり、勉学、生活の両面で指導を行っている。第69回診療放射線技師国家試験（平成29年2月23日実施）は4年生43名（卒業見込）が受験し、そのうち42名が合格した（合格率98%）。編入生を含む卒業生44名の進路は、医療機関に33名（うち、大学病院10名）、大学院進学が11名であった。学部教育は、専任教員による授業の他に、非常勤講師を招いた特別講義、臨床実習など、将来医療現場で役に立つと思われる教育活動が行われている。また、研究力の強化のため3年後期から卒業研究のための研究室配属を行っている。

大学院教育：

平成 28 年度は、博士課程（前期課程）1 年 15 名、2 年 11 名、博士課程（後期課程）1 年 2 名、2 年 3 名、3 年 7 名の計 38 名であった。前期課程では 10 名が修士論文を提出し、修士の学位を取得した。社会人 1 名を除く 9 名の修了者の進路は医療機関 7 名（うち、大学病院 3 名）、企業 2 名であった。

以下、学生名と修士論文題目を記す。

五十嵐 健悟	X 線 CT 画像の信号検出能に及ぼす確率共鳴効果
石黒 健太	三次元シネ位相コントラスト磁気共鳴法を用いた脳動脈瘤の血流動態解析-計算流体力学との比較-
大澤 充晴	コーンビーム CT (CBCT) の被ばくと画質の検討
大谷 菜月	マンモグラフィ装置における DQE 算出時の入射光子数の精度に関する研究
小芝 有美子	甲状腺機能亢進症に対する I-131 内用療法後の甲状腺への I-131 集積定量と治療効果予測に関する検討
小島 優芽	MAGIC ゲル線量計の計測値に対する容積の影響
坂上 久記	不均質ファントムを用いた電子線線量分布計算アルゴリズムの評価
島田 星良	高エネルギー電子線深部線量分布の改良
水野 健吾	EEG-fMRI 同時計測を用いた 1 秒未満の時間分解能での脳活動変化の測定
吉田 旭宏	リアルタイム fMRI を用いたニューロフィードバックシステムの研究

後期課程では、3 名が博士論文を提出し、博士の学位を取得した。

以下、学生名と博士論文題目を記す。

遠地 志太	X 線 CT 画像の定量画質評価法に関する研究
清水 敬二	日本の地域医療施設におけるデリバリーFDG-PET/CT の PET 画質標準化に関する研究
安井 啓祐	スポットスキャニング陽子線治療における物理コリメータの有用性の検討と臨床応用

3. 研究活動

当専攻の教員は幅広い専門分野を研究領域としているため、個々の教員が独自の研究活動を行っている。一部にグループによる研究活動，専攻以外との共同の研究活動も行っている。

以下には，各教員の研究領域を示し，外部と協力して実施している研究活動の一部を示す。

池田 充 教授 : 被ばく線量と画質との関係に関する研究。医用画像の画質評価に関する研究。

礪田 治夫 教授 : 磁気共鳴 (MR) を用いた脳機能解析・血流解析 (特に脳動脈瘤)・心筋運動解析に関する研究。サーモサイフォン効果を具備した凍結治療プローブ開発。MR 撮像技術・MR 画像診断ならびに神経系・頭頸部画像診断に関する研究。

今井 國治 教授 : 数理統計学及び情報理論を用いた医用画像の画質評価法の構築。造影剤の薬物物性及び造影特性に関する研究。

加藤 克彦 教授 : ポジトロン核医学に関する研究。核医学画像診断。甲状腺機能亢進症の ^{131}I 内用療法。 ^{18}F -FDG, ^{18}F -DOPA, ^{11}C -choline, ^{11}C -methionine, ^{18}F -FLT, ^{18}F -Na, ^{18}F -FMISO, ^{18}F -FAZA 等を利用した腫瘍 PET/CT に関する研究。 ^{123}I -IMP を使用した SPECT 検査における新しい低侵襲性脳血流定量測定法の確立に関する研究。各種核医学検査における定量測定に関する研究。

小寺 吉衛 教授 : 医用画像の評価法の開発。検出器，表示系を含む医用画像の解析・評価。画質の向上と被曝線量の低減を目的としたデジタル画像処理。3次元画像表示システムの開発。

島本 佳寿広教授 : 乳腺の画像診断に関する研究。超音波装置のディスプレイの性能および環境が病変検出に及ぼす影響に関する研究。読影環境と疲労度との関連に関する研究。読影医の診断論理の妥当性を検証する研究。

古川 高子 教授 : 放射性同位元素を用いる分子イメージングに関する基礎研究；

- (a) 腫瘍イメージングのための分子プローブの開発・評価。
- (b) 標的アイソトープ治療に向けた分子プローブの開発・評価。

- 山本 誠一 教授 : PET 装置, ガンマカメラ, 複合イメージング装置などの分子イメージング機器の研究開発。粒子線治療に関係したイメージングに関する研究。
- 津坂 昌利准教授 : 術中 MRI を用いた脳外科手術ナビゲーションシステムの精度に関する研究。医療用液晶モニタの画質評価。携帯情報端末の画質評価と医療への応用。IT 活用による医療技術者教育システムの開発。高速画像ネットワークの技術開発と応用。暗号化通信, 画像圧縮技術の遠隔医療への応用。
- 小口 宏准教授 : 電子線計測法 (水吸収線量計測, 相互校正法) に関する研究, ポリマーゲル計測法の臨床応用に向けた開発, 呼吸同期放射線治療に関する精度評価, 画像誘導放射線治療 (IGRT) に関する精度評価。産業総合技術研究所との共同研究「フィールドにおける高エネルギー電子線水吸収線量校正の不確かさ評価と相互校正手順の標準化」に参画。
- 小森 雅孝准教授 : 陽子線治療における新規照射野形成法の開発。陽子線治療における中性子被ばくに関する研究。高エネルギー X 線治療計画装置の線量分布計算精度の評価。
- 小山 修司准教授 : 診断領域 X 線の計測法の研究。X 線 CT の患者・術者の被ばく線量計測。診断領域 X 線のエネルギー計測。マンモグラフィにおける線量計測。MR 撮像技術に関する研究。
- 川浦 稚代 講師 : 人体ファントム計測システムを用いた医療被ばくの測定・評価。日本人乳幼児人体ファントムの開発。X 線 CT 検査における画質と線量の関係解明。
- 本間 光彦 助教 : 人体解剖実習体の X 線撮影・CT 撮影に関する研究。放射線カウンセリングに関する研究。CR の応用利用に関する研究。放射線治療領域における放射線計測法に関する研究。

福山 篤司 助教 : MR 装置を用いた血管内血流動態の計測精度の検証と改善。
Readout Segmented-Echo Planar Imaging を用いた QSI 解析。
RESOLVE シーケンスで得られる ADC の精度検証

藤井 啓輔 助教 : X 線 CT 検査における成人および小児患者の被ばく線量評価と放射線防護に関する研究。IVR における患者の放射線防護に関する研究。低線量肺がん CT 検診における撮影条件の最適化に関する研究。

井堀 亜希子 助教 : フォトンカウンティング技術を応用したマンモグラフィにおける物質同定に関する研究。

4. 対外的な、または社会に関わりある活動

- 1) 第 69 回診療放射線技師国家試験問題検討会の「基礎医学大要」の科目副責任者として国家試験問題の検討を行った (池田)。
- 2) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を務めた (磯田)。
- 3) 公益社団法人日本医学放射線学会中部地方会の世話人を務めた (磯田)。
- 4) 日本神経放射線学会の評議員を務めた (磯田)。
- 5) 一般社団法人日本磁気共鳴医学会の代議員を務めた (磯田)。
- 6) 日本低温医学会の理事を務めた (磯田)。
- 7) 国際凍結治療学会 (International Society of Cryosurgery) の会長を務めた (磯田)。
- 8) 日本生体医工学会東海支部の支部理事を務めるとともに、平成 28 年度日本生体医工学会東海支部学術集会の大会長として企画・準備・運営を行った (磯田)。
- 9) 東海総合画像研究会の世話人を務めた (磯田)。
- 10) 脊椎・脊髄画像クラブの世話人を務めた (磯田)。
- 11) ニューロイメージングカンファレンスの世話人を務めた (磯田)。
- 12) 名古屋大学脳とこころの研究センターシンポジウムの企画に参画するとともに、演者を務めた (磯田)。
- 13) 「ポスト『京』重点課題②『個別化・予防医療を支援する統合生命科学』」諮問委員会諮問委員を務めた (磯田)。
- 14) 第 17 回国立大学診療放射線技師教育施設協議会に本学代表者として出席した (磯田)。
- 15) 第 61 回全国診療放射線技師教育施設協議会に本学代表者として出席した (磯田)。
- 16) 「診療放射線技師関連法令および臨床実習あり方検討委員会報告書」に関わる検討

- のため、第 62 回全国協議会役員校の代表者として拡大役員会に 3 回出席した（磯田）。
- 1 7) 「診療放射線技師関連法令および臨床実習あり方検討委員会報告書」に関わる検討のため、第 62 回全国協議会役員校の代表者として日本診療放射線技師会との会合に 5 回出席した（磯田）。
 - 1 8) 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会において、専門委員を務めた（今井）。
 - 1 9) 第 56 回日本核医学会学術総会副会長を務めた（加藤）。
 - 2 0) 臨床複雑系・フラクタル解析学会の第 3 回学術集会大会長を務めた（加藤）。
 - 2 1) 一般社団法人日本核医学会の評議員を務めた（加藤）。
 - 2 2) 一般社団法人日本核医学会編集委員会の委員を務めた（加藤）。
 - 2 3) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を務めた（加藤）。
 - 2 4) 公益社団法人日本医学放射線学会保険委員会委員を務めた（加藤）。
 - 2 5) 公益社団法人日本医学放射線学会編集委員会委員を務めた（加藤）。
 - 2 6) 一般社団法人日本核医学会担当委員として、2022 年の世界核医学会の誘致活動を行った（加藤）。
 - 2 7) 日独放射線交流計画第 18 回ワークショップに出席し、ドイツの放射線科医と学術・文化交流を行った（加藤）。
 - 2 8) 米国核医学会 (SNMMI) に出席し、第 56 回日本核医学会学術総会の広報活動を行った（加藤）。
 - 2 9) 日本核医学会中部地方会の世話人を務めた（加藤）。
 - 3 0) 日本核医学会 PET 核医学分科会 PET サマーセミナー 2016 in 熊本に出席し、日本核医学会学術総会、日本核医学技術学会総会学術大会の広報活動を行った（加藤）。
 - 3 1) 日本医学放射線学会秋季臨床大会において、代議員会、編集委員会に出席し、活動を行った（加藤）。
 - 3 2) ヨーロッパ核医学会 (EANMMI) に出席し、第 56 回日本核医学会学術総会の広報活動を行った（加藤）。
 - 3 3) 医用画像情報学会平成 28 年度年次(第 175 回)大会において、顧問として理事会に出席し、学会の企画運営に携わった（小寺）。
 - 3 4) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌 Radiological Physics and Technology” (RPT) 誌の副編集委員長の一人として編集に従事した（小寺）。
 - 3 5) Computer Assisted Radiology and Surgery (CARS) の program committee の委員としてプログラム選考に従事した（小寺）。
 - 3 6) 日本乳腺甲状腺超音波医学会幹事を務めた（島本）。
 - 3 7) 医用画像認知研究会の事務局として幹事を務めた（島本）。
 - 3 8) 愛知県放射線科医会幹事を務めた（島本）。

- 3 9) 日本超音波医学会委員代議員を務めた(島本)。
- 4 0) 日本医学放射線学会中部地方会世話人を務めた(島本)。
- 4 1) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌 "Radiological Physics and Technology" (RPT) 誌の編集委員として、編集に従事した(山本)。
- 4 2) IEEE Nuclear Medical and Imaging Sciences Council の選出委員として、委員会の運営を務めた(山本)。
- 4 3) フランス、ストラスブルグで行われた 2016 Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference のプログラム委員を務めた(山本)。
- 4 4) 一般社団法人医学物理学会の計測委員として会の企画・運営に関わり、第 115 回日本医学物理学会学術大会の大会長として企画準備を行った(小口)。
- 4 5) 公益社団法人日本放射線技術学会の評議員・放射線治療専門部会委員長として学会の企画・運営に関わり、専門部会 2 回、放射線治療セミナーを 3 回開催した(小口)。
- 4 6) 公益社団法人日本放射線技術学会の第 7 2 回、第 7 3 回放射線治療部会で座長を行った(小口)。
- 4 7) 公益社団法人日本放射線技術学会の第 4 3 回、第 4 4 回放射線治療セミナーで座長を行うとともに、第 4 5 回では電子線相互校正法の講演と実技講習を行った(小口)。
- 4 8) 公益社団法人日本放射線技術学会関東部会の関東 RT 研究会副代表として会の企画・運営に関わり、セミナーを 5 回、シンポジウムを 1 回開催した(小口)。
- 4 9) 一般社団法人医学物理士認定機構の評議員・教育委員・広報委員として会の企画・運営に関わり、医学物理士認定、医学物理教育コース認定を行い、教育講演会を 2 回開催し、「放射線治療品質管理プログラム」についての講演を那覇市と尼崎市で 2 回行った(小口)。
- 5 0) 放射線治療品質管理士認定機構認定機構の理事として、会の企画・運営に関わり、放射線治療品質管理講習会の座長を務めた(小口)。
- 5 1) 公益社団法人日本放射線腫瘍学会の物理技術 WG 代表として、会の企画・運営に関わった(小口)。
- 5 2) 日本放射線治療専門放射線技師認定機構の理事・出版委員として、会の企画・運営に関わり、認定事業、教育セミナー開催、機関誌発行を行った(小口)。
- 5 3) 長野赤十字病院放射線治療管理委員会の外部委員として、2 回の会議に参画した(小口)。
- 5 4) 岐阜県立多治見病院放射線治療管理委員会の委員として、2 回の会議に参画した(小口)。
- 5 5) 国立がん研究センターがん対策情報センターのアドバイザーパネル委員として、放射線治療の安全対策に参画した(小口)。
- 5 6) 東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事として、研究会を 6 回開催した(小口)。

- 57) 東海放射線腫瘍研究会第42回技術部会にて特別講演の座長を務めた(小口)。
- 58) 平成27年度放射線治療専門放射線技師認定機構のセミナー講師(電子線計測)を行うと共に、認定試験問題の作成、認定試験の実施を行った(小口)。
- 59) 日本放射線技術学会の学術委員として、研究、教育、学会の企画、提案を行った(小口)。
- 60) 名古屋大学放射線治療物理学セミナーを4回開催し、第2回セミナーでは相互校正法の講演および実技指導を行い、第4回では特別講演2の座長を務めた(小口)。
- 61) 日本放射線治療専門放射線技師認定機構統一講習会基礎コース(関東1地区、関東2地区、東海地区、)で電子線計測法の講演、計測実習を行った(小口)。
- 62) 平成28年度放射線治療専門放射線技師認定機構の認定指導者実機講習会(東芝メディカル那須工場)の企画立案を行い、相互校正法の講演および実技指導を行った(小口)。
- 63) 医療放射線管理委員会の委員として、医用放射線の安全利用と管理に参画した(小口)。
- 64) 医療用線量等校正部会の委員として、高エネルギー放射線のトレーサビリティ管理に参画した(小口)。
- 65) Varian Medical SystemsのMedical Physics Consultation Program WGの委員として、放射線治療の品質管理支援事業に参画した(小口)。
- 66) 名古屋陽子線治療センターの治療技術・物理検討委員会委員長を務めた(小森)。
- 67) 一般社団法人日本医学物理学会の教育委員を務めた(小森)。
- 68) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌“Radiological Physics and Technology”(RPT)誌の編集委員を務めた(小森)。
- 69) 東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事を務めた(小森)。
- 70) 公益社団法人日本放射線技術学会代議員として、会の運営に参画した(小山)。
- 71) 公益社団法人日本放射線技術学会計測部会委員として、会の企画・運営に参画した(小山)。
- 72) 公益社団法人日本放射線技術学会中部支部副支部長として、会の企画・運営に参画した(小山)。
- 73) 日本CT技術学会理事として、会の企画・運営に参画した(小山)。
- 74) 国際計量研究連絡委員会放射線標準分科会専門委員として、本邦における放射線計量標準の運営に参画した(小山)。
- 75) 一般社団法人日本磁気共鳴医学会安全性評価委員会に委員として、参画した(小山)。
- 76) 平成28年度日本生体医工学会東海支部学術集会の実行委員長として、企画・準備・運営を行った(小山)。
- 77) 日本保健物理学会の編集委員を務めた(川浦)。

- 78) 一般社団法人日本医学物理学会の防護委員会の委員を務めた(藤井)。
- 79) 平成28年6月公益社団法人愛知県診療放射線技師平成28年度フレッシュセミナーにおいて、「胸部単純撮影講座」の教育講演を行った(本間)。
- 80) 公益社団法人日本診療放射線技師会の代議員として、会の企画・運営に関わった(本間)。
- 81) 公益社団法人愛知県診療放射線技師会の理事として、会の企画・運営に関わった(本間)。

(主任：礒田 治夫)

医療技術学専攻 病態解析学講座・検査技術科学専攻（平成28年度）

病態解析学講座では、正常ならびに病的状態における生体の諸現象をさまざまな専門分野からアプローチし、得られた情報を解析、統合し、医学ならびに保健学を推進するために有用な生体情報についての学術理論の展開や、新たな技術の開発およびその応用を教授・研究している。平成24年4月には名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）での大学院講座化が実現し、病態解析学講座は新体制のもとで研究、教育の礎を着実に構築してきた。

本講座は、環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学からなる。この6つの学問領域が先端的な研究、学際的な病態解析、技術開発を進めるとともに、指導的医療人として、高度化・多様化する医療の動向を見据え、病態解析学研究を遂行できる能力の育成を推進している。

また教育の目標としては、社会の急激な変化に対応可能な俯瞰力や独創力に加え、チーム医療の積極的な推進、また産学官にわたりグローバルに活躍できる能力をもった、我が国の未来の保健医療を創る人材の育成を掲げている。

1. 運営

本講座は環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学の6つの学問領域からなる大講座であり、運営に関しては領域間の壁をなくして一体化した体制を築いてきた。講座の運営は講座主任（永田）を中心に、全17名の教員が参加する講座会議の審議・決定に従って行われている。講座会議は第1、第3水曜日の12時、ならびに第4水曜日の17時から定期的に行われ、必要に応じて臨時に開催されている。

2. 教育活動

- 1) 4月に第19期の入学生43名（推薦入学生17名、前期日程入学生25名、私費外国人留学生1名）を迎えた。第17期の3年次編入生は、入学者がなかった。
- 2) 4月3日（日）の新入生ガイダンスには教員と1年生全員が参加し、専攻の教育と学生生活に関するガイダンス、教員の自己紹介と指導教員の確認、学生の自己紹介などが行われた。
- 3) 感染対策

病態解析学講座として、感染対策委員（川村）を中心に以下のごとく感染対策教育を行った。

本学では入学時に風疹ウイルス、麻疹ウイルス、ムンプスウイルス、水痘ウイルス、B型肝炎ウイルスに対するワクチン接種を義務づけており、新年度開始時におこなわれる1~4年生の各学生ガイダンスの際に、感染予防の意義およびワクチン接種の重要性について指導するとともに各種ワクチンの接種状況を確認した。さらに、4年生の臨地実習前には、全員がワクチン接種および抗体検査を終了し、名古屋大学医学部附属病院での臨地実習受け入れ基準を満たしていることを再度確認した。臨地実習直前におこなわれるガイダンスにおいては、臨床検体を扱う上での感染予防対策実施の意義、標準予防策および感染経路別予防対策の実施方法について指導し、さらに各種感染症診断のための検査方法とワクチン接種の意義についても講義を行った。また、病原微生物学実習時における感染防止への心得として、「感染の成立と感染経路」や「滅菌と消毒」の再講義をおこなうとともに、初回実習時には衛生的手洗い演習を導入するなど、学生実習における感染予防にも努めた。

4) 4月27日(水)には検査技術科学専攻の2年生が中心になって、教員と共に新入生歓迎会を大幸厚生会館にて開催した。

5) 5月17日(火)には第16期生の臨地実習を充実させることを目的に、病態解析学講座教員、医学部附属病院検査部の教員および技師との実習前の合同会議(第1回臨床検査専門委員会)を開催した。臨地実習は6月6日(月)から7月29日(金)まで医学部附属病院(検査部・輸血部・病理部)で実施された。9月28日(水)に実習後の合同会議(第2回臨床検査専門委員会)を開催し、実習での反省点の確認と来年度からの指定白衣の導入などについて検討した。

6) オープンキャンパス

8月10日(水)に大幸キャンパスで実施し、申込者数220名に対して来場高校生数は209名であった。検査技術科学専攻の説明、教育カリキュラム、教育の目標と内容、特色と卒業後の進路の説明、卒業生からの講演を企画した。その後、参加者が研究室を訪ね、教員や院生による研究内容などの説明および顕微鏡を用いた観察などを体験した。同様の内容で午前・午後ともに2時間ずつ実施したが、アンケート結果より参加者の満足を確認でき、有意義なオープンキャンパスを実施できた。

7) 8月25日(木)に3年次編入試験を行ったが、合格者はいなかった。

8) 8月23日(火)に大学院医学系研究科博士課程(前期課程)の入学試験を実施し、医療技術学専攻病態解析学分野では15名の合格者を決定した。別の1名は、本学創薬研究科に進学した。また、8月24日(水)に同分野博士課程(後期課程)の入学試験を実施し、1名の合格者を決定した。

9) 平成29年1月31日(火)には私費留学生入学試験を実施し、1名の合格者を決定した。

10) 平成29年3月には、本専攻の第16期生の42名が卒業した。そのうち16名が大学院博士前期課程(うち15名は医学系研究科病態解析学分野、1名は本学創薬研究科)へ進学し、就職希望の26名のうち1名をのぞき、大学病院や一般病院の検査部門、

健診センター，民間企業および行政に就職した。また，大学院医学系研究科病態解析学分野（博士前期課程）の第14期生の修了生として16名を輩出した。本年度の前期課程修了者に社会人はいなかった。そのうち1名が本学大学院博士課程（後期課程）に進学した。就職希望の15名は全員が就職し，就職率は100%であった。博士課程（後期課程）では1名が修了し，日本学術振興会特別研究員に採用された。

11) 臨床検査技師国家試験に対する準備として，全教員による教育指導と6回の模擬試験を実施した。第63回国家試験（平成29年2月22日実施）の新卒合格者数は37/41（合格率90.2%）であった。

12) 平成28年度の教育活動の成果として，槇山愛弓（M2）は第8回バクスアルタ凝固関連基金を受賞した。橋本恵梨華（M1）は第9回アジア太平洋血栓止血学会 Poter Award（平成28年10月6-9日）を，坂根寛人（M1）は第78回日本血液学会学術集会優秀ポスター賞（平成28年10月15日）を受賞した。また，垣原美紗樹（B4）は文部科学省主催／第6回サイエンス・インカレにて国立研究開発法人科学技術振興機構理事長賞（文部科学大臣表彰に次ぐ2番目の賞）を受賞した（平成29年3月5日）。高木夕希（D3）は「国立大学臨床検査学系博士後期課程優秀賞」の最優秀賞（平成29年3月17日）を受賞した。上田裕子（M1）は第41回日本医用マスマスク学会年会若手ポスター賞（平成28年9月15日）を受賞した。

3. 研究活動

本専攻では，4月に博士課程（前期課程）に11名の第15期生，博士課程（後期課程）に3名の第13期生を迎えた。平成29年2月4日（土）に修士論文発表会を開催し，前期課程第14期生16名が成果を発表した。平成28年9月28日（水）には後期課程予備審査会（研究発表会）を開催し，4名が研究成果を発表した。学部関係では5月28日（土）に，第16期生による卒業研究発表会が開催された。以下に各部門における卒業研究発表演題を示す。

【病因病態解析学部門】 指導教員：川部勤 川村久美子 松島充代子

1. p62を起点とする細胞保護効果の誘導におけるフラボノイドの比較検討
2. 病態生理に即したI型アレルギー検査法の検討
3. 胸腺非依存性抗原に対する免疫応答におけるCD40の役割の解明
4. 動物とヒトとの間における基質拡張型β-ラクタマーゼ産生大腸菌の循環に関する研究 I-家畜から分離されたCTX-M-型基質拡張型β-ラクタマーゼ産生大腸菌の分子疫学解析-
5. 動物とヒトとの間における基質拡張型β-ラクタマーゼ産生大腸菌の循環に関する研究 II-犬猫から分離された基質拡張型β-ラクタマーゼ産生大腸菌の分子疫学解析-

【生体生理解析学部門-1】 指導教員：永田浩三 内仲彩子

1. L/N 型 Ca 拮抗薬の晩期投与による食塩感受性高血圧ラットの心不全抑制効果
2. メタボリックシンドロームラットの病態および食塩応答における褐色脂肪組織の役割の検討

【環境病因解析学部門-1】 指導教員：近藤 高明

1. ワイヤレス活動量計を用いた歩数記録の解析
2. ワイヤレス活動量計を用いた睡眠記録の解析
3. 高感度体動センサーを用いた睡眠時間と睡眠ステージの解析
4. 健常成人を対象とした CD36 遺伝型と生活習慣病リスクとの関連性

【病態化学解析学部門】 指導教員：涌澤伸哉 上山純

1. ヒト肝癌由来細胞における酸化ストレスと茶成分による抑制作用
2. 鉄負荷ラット肝へモジデリンにおける鉄・銅の解析
3. 尿中代謝物分析に及ぼす遠心前処理の影響
4. LC-MS/MS による白飯中のジノテフラン分析と曝露推定
5. 尿中に排泄される新規ピレスロイド系殺虫剤代謝物の測定法開発
6. β -ラクタム抗生物質が血中 Alb 測定に及ぼす影響

【形態情報解析学部門】 指導教員：長坂徹郎 川井久美 橋本克訓

1. 子宮内膜増殖性疾患の形態学および免疫組織化学的解析
2. 乳癌コンパニオン診断における切片厚の影響
3. MEN2A 型変異 RET を有する甲状腺髄様癌細胞におけるチロシンキナーゼ阻害剤スニチニブの効果

【分子病態解析学部門】 指導教員：小嶋哲人 高木明 田村彰吾

1. アンチトロンビン欠乏症の *SEPIN1* 解析
2. プロテイン S 欠乏症患者の *PROS1* 解析
3. フィブリノゲン欠乏症 5 症例におけるフィブリノゲン遺伝子解析
4. 血友病 B 症例における血液凝固第 IX 因子遺伝子解析
5. 偏った X 染色体不活化によってもたらされた女性重症血友病 A 症例
6. アンチトロンビン抵抗性解析におけるワルファリン服用の影響

【生体生理解析学部門-2】 指導教員：平山正昭

1. パーキンソン病の臨床症状の変化と腸内細菌叢の関係
2. 筋萎縮性側索硬化症モデルマウスにおける分子状水素の影響

3. パーキンソン病患者における腸内細菌の変動と主要禁酒の水素産生量測定
4. 高齢者とパーキンソン病患者における連続刺激を用いた体性感覚誘発磁界-RMS法を用いた検討

【環境病因解析学部門-2】 指導教員：石川哲也 林由美

1. トロンボモジュリン遺伝子導入が脂肪由来幹細胞の機能・体内動態に与える影響について

4. 対外的な、または社会に関わりある活動

A) 国際交流

開始以来7年目を迎えた延世大学（韓国）との国際交流事業は、11月2～4日に名古屋大学で行われ、病態解析学講座からは4名の大学院生（上田裕子、菅野拓也、高木夕希、平野文香）が研究成果について口頭発表と質疑応答を行った。延世大学の大学院生については、交流会終了後にさらに11月9日まで日本に滞在し、研究室訪問などを行った。2017年2月13日から20日まで、菅野拓也および平野文香が延世大学に訪問し、研究交流を深めた。この交流事業組織委員会には、国際交流委員の近藤高明教授と上山純准教授が出席し、企画や運営の役割を担った。

8月28日（日）から9月5日（月）にタイのマヒドン大学アセアン保健開発研究所とチュラロンコン大学の協力のもとで、「タイ保健学科医療体験入門プログラム」が実施され、4名の検査技術科学専攻学部生が短期研修に参加した。

小嶋哲人教授は、10月に台湾・台北で開かれた第9回アジア太平洋血栓止血学会（2016APSTH）に出席し、指導大学院生3名（ポスター3題、内1題はPoster Award受賞）の発表を指導するとともに、アジア諸国の研究者と様々な情報交換を行った。また、11月には韓国・延世大学との研究交流事業に参加し、指導大学院生の研究成果発表を指導した。

永田浩三教授は、9月にソウルで開催された第26回国際高血圧学会（ISH2016）で発表者の内仲彩子助教（YIA-Bronze賞受賞）の共同演者として口頭発表を指導した。また、11月2～4日に名古屋大学で行われた延世大学（韓国）との国際交流事業では、講座主任として11月3日の発表会後に発表者7名（延世大学院生2名、ミャンマー出身の藤田保健衛生大学留学生1名、本学大学院生4名）へのCertificateの授与を行なった。

近藤高明教授は、8月31日-9月4日に神戸市で開催された第32回世界検査医学会

に参加し、2名の大学院生のポスター発表の指導を行った。

川部 勤教授と松島充代子講師は、8月21日～8月26日に開催された17th International Congress of Immunology (ICI 2016 Melbourne, Australia)において指導大学院生4名のポスター発表を指導した。また、松島充代子講師は自身でもポスター発表を行った。9月16日に開催されたThe 14th Matsuyama International Symposium 2016において指導大学院生1名のポスター発表を指導した。

石川哲也教授は、6月16～17日に開催された第37回日本炎症・再生医学会（京都）で指導大学院生1名のポスター発表を指導した。8月31日～9月4日に開催されたthe 32nd World Congress of Biomedical Laboratory Sciences（神戸）においては指導大学院生1名のポスター発表を指導した。さらに、9月10～11日に開催された第40回日本鉄バイオサイエンス学会学術集会（名古屋）において指導大学院生1名の口演発表を指導した。

平山正昭准教授は、6月に行われたthe 20th International MDS Congressにてポスター発表を行った。8月4TH WORLD PARKINSON CONGRESSにてポスター発表を行った。2016年2月The 16th International Parkinson's disease symposium in Takamatsuにて招待講演でシンポジストを行い、また、実行委員として参加した。2017年3月に行われた13th International conference on Alzheimer's disease & Parkinson's diseaseにてポスター発表を行った。

川村久美子准教授は、平成25年10月に採択された博士課程教育リーディングプログラム「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラムに協力教員として参加している。プログラム内ではアドミッション・リクルートWGに参画し、6リーディング合同プログラムなどの企画運営に携わることで積極的にリクルート活動をおこない、10月には第2回生プログラム正規生20名を迎えた。また、プログラムの協力教員として、講義グローバルリーダーにおける講師招聘や海外実地研修の企画を行なった。また、平成29年2月のフィリピンへの海外実地研修の企画運営に参画ならびに同年3月のミャンマー視察見学に参加した。

上山純准教授は、4月17日-19日に開催された第2回 International Conference on Human Biomonitoring (Berlin, Germany)にてポスター発表し、環境省が主体となって実施している「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」の国際連携活動についてドイツ研究者と協議した。

林由美助教は、9月8日-9日に開催された英国王立化学会東京インターナショナル

コンファレンス(RSC-TIC)に参加し、フラッシュプレゼンテーションおよびポスター発表を行い、Best Poster Awardを受賞した。また、The 3rd Annual European Congress of the Association for Mass Spectrometry: Application to the Clinical Lab (MSACL 2016 EU)に参加し、ポスター発表を行った。

内仲彩子助教は、9月24日-9月29日にソウルで開催された第26回国際高血圧学会(ISH2016)に参加し、口頭発表を行い、YIA-Bronze賞を受賞した。

B) 大学間交流

5月16日(月)に札幌で第53回国立大学臨床検査技師教育協議会が開催され、全国20校の代表が参加した。本学からは永田浩三主任が代表として出席した。会長校である北海道大学の山口博之議長の議事進行で活発な議論が行われ、承合事項として、「臨床検査技師業務拡大に伴う指定規則改定への対応」、「4学期制移行への準備または導入状況と問題点」、「編入学制度のこれまでの変遷と、これからの展望」、「実習費用の学生負担」、また、協議事項として「国立大学臨床検査技師教育協議会の役割」、「モデルコアカリキュラムの必要性」、「予算削減状況における教育人材の確保・育成の工夫」が取り上げられた。承合事項の2~4番目については、議長より後日、議事メモが送付された。コアカリキュラム作成に関しては、引き続き審議を継続することとなった。5月30日(月)と12月19日(月)には、日本臨床検査学教育協議会の各々定時総会と臨時総会が東京医科歯科大学で開催され、永田浩三主任が代表として出席した。

永田浩三教授は、8月に開催された第11回日本臨床検査学教育学会学術大会に参加し、指導大学院生1名の口頭発表を指導した。またこの期間中に開催された科目別分科会第4回例会に出席し、生体検査学(循環生理学、呼吸生理学、神経生理学、画像検査学)の会長として臨地実習および学内実習に関する課題と情報提供の議事進行を行った。

近藤高明教授は、8月に開催された第11回日本臨床検査学教育学会学術大会に参加し、指導大学院生1名の口頭発表を指導した。またこの期間中に開催された科目別分科会(公衆衛生学)第2回例会に出席し、会長として臨地実習および学内実習に関する課題と情報提供の議事進行を行った。また日本気象協会が主催し複数大学の研究者が参加している「発症分析研究会」において、気象と健康との関連性に関する共同研究を実施した。全国多数の大学と研究機関が参加しているがんコホート研究(J-MICC Study)には継続して参加し、データの解析を行ってきた。

涌澤伸哉教授は、9月10日（土）～11日（日）の会期で名古屋大学豊田講堂において第40回日本鉄バイオサイエンス学会学術集会を大会長として企画し開催した。同学術集会のミニシンポジウム「遺伝性鉄過剰症と糖尿病」の座長を務めた。

石川哲也教授は、平成24年度から国立研究開発法人日本医療研究開発機構研究費「肝炎等克服実用化研究事業（B型肝炎創薬実用化等研究事業）」の2つの研究班「B型肝炎ウイルスの持続感染を再現する効率的な培養細胞評価系の開発に関する研究」と「HBV cccDNAの制御と排除を目指す新規免疫治療薬の開発」に分担研究者として参加し、前者では名古屋市立大学大学院医学研究科病態医科学、田中靖人教授と、後者では岐阜大学大学院病態情報解析医学、伊藤弘康准教授と共同研究を行っている。また、平成25年度からは、同じく日本医療研究開発機構「再生医療実現拠点ネットワークプログラム」での技術開発個別課題「iPS細胞分化・がん化の量子スイッチング in vivo Theranostics」（代表研究者 名古屋大学大学院工学研究科、馬場嘉信教授）に分担研究機関として、林由美助教とともに参加している。同研究課題においては、京都大学再生医科学研究所、田畑泰彦教授、名古屋市立大学大学院薬学研究科、松永民秀教授と共同研究を行っている。

川部勤教授と松島充代子講師は、中部大学応用生物学部山本 敦教授らとともに推進してきた共同研究について、公益財団法人科学技術交流財団の平成28年度研究会支援事業に採択された「肺における血中薬物の吸収・排泄機構に関する研究会」では松島充代子講師が座長となり運営した。また、同財団を事業主体とする平成27年度共同研究推進事業に採択された「高親水性表層を有する多層型薬物用吸着剤の開発と呼気中薬物モニタリングへの応用」を受託研究し、さらに「呼気を用いる非侵襲的薬物動態解析法に関する研究」（基盤研究（C）研究代表者山本 敦）をこの共同研究チームのもとで推進した。また、広島市立大学情報科学研究科式田光宏教授との共同研究について「呼吸器末梢気道でのその場計測を可能にするカテーテルセンサ技術の開発」（基盤研究（B）研究代表者式田光宏）のもと研究推進し、新たに国際特許「心拍信号検出装置、およびそれに用いる気道内気体流量測定装置」（PCT/JP2016/053293）を出願した。さらにこの共同研究は（株）コスモスウェブも参加する産学連携共同開発事業として現在展開中である。

長坂徹郎教授は、大学院研究、教育の一環として名古屋市立大学病院病理診断部の山下依子准教授と婦人科領域の腫瘍に関する分子病理学的研究を行った。

平山正昭准教授は、順天堂大学医師臨床治験「パーキンソン病における水素水多施設共同試験」に参加している。“パーキンソン病における腸管内細菌叢変動と各種消化管ペプチド、炎症物質および菌体成分との関与の解明”を多施設研究として秋田脳研

神経内科部長 前田哲也と共同研究している。平成 28 年度 革新的先端研究開発支援事業「微生物叢と宿主の相互作用・共生の理解と、それに基づく疾患発症のメカニズム解明」パーキンソン病の起因となる腸管 α -synuclein 異常蓄積に対する腸内細菌叢の関与の解明 代表大野欽司のプロジェクトに参画し、臨床部門での検体採取と解析を担当している。

川井久美准教授は、8月に開催された第11回日本臨床検査学教育学会学術大会に参加し、指導大学院生1名の口頭発表を指導した。平成27年度から「蛍光点滅観察によるRNA1塩基変異の1分子病理診断」に分担研究者として参加し、大阪大学産業科学研究所、川井清彦准教授と共同研究を行っている。この研究成果をもとにキャンノン財団研究助成を平成29年度より受けることとなった。

また、川井久美准教授、橋本克訓助教は、名古屋大学平成27年度教育奨励費の後援を受けて、3D解剖セミナーを開催した。本セミナーは、卒前教育および大学院での研究活動への3D解剖教育システムMEAVの活用推進を目的として開催した。3月6日、7日の2日間にわたり、パナソニックシステムワークス株式会社の協力を得て実践的・体験的なセミナーを開催し、大幸地区4専攻の教員、学生、大学院生などのべ27名が受講した。

上山純准教授は、平成27年度から名古屋市立大学上島通浩教授とともに環境省の環境研究総合推進費を受け、子どもの殺虫剤曝露状況の評価法開発に現在取り組んでいる。また、「子どもの健康と環境に関する全国調査（環境省）」の名古屋ユニットにおける生体試料分析開発を一部担当している。これまでの衛生学領域における研究活動が評価され、第87回日本衛生学会学術総会にて学会奨励賞を受賞した。8月に開催された第11回日本臨床検査学教育学会学術大会に参加し、指導大学院生1名の口頭発表を指導した。

田村彰吾助教は、第12回麒麟塾で麒麟児賞を受賞した（2016年7月2日）。

C) 地域との連携

小嶋哲人教授は、東海へモフィリアワークショップ2016（平成28年10月1日）において、世話人として地域への研究活動の情報提供、啓発活動を行った。また、広島開催の第2回西日本血友病B研究会（平成28年8月20日）にて「第IX因子遺伝子解析の最新情報」の講演を行った。さらに、「カスタマーカンファレンス in 名古屋 ~ 第2回 Hemostasis Seminar」（平成28年11月12日）で「DOACsの今とこれから。臨床と検査はどう変わるか。」の講演を通して、東海4県の臨床検査技師教育として

の啓発活動を行った。

永田浩三教授は、日本循環器学会社員、日本高血圧学会評議員、日本心不全学会評議員、日本内科学会東海支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。東海心血管再生代謝研究会（最終回）の世話人および名古屋大学分子細胞循環器研究会の幹事として循環器疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化に尽力した。名古屋大学予防早期医療創成センター教授（兼任）および日本循環器学会東海支部の院内調査に関する派遣医師候補者を務めた。名城大学附属高等学校・学校評議員として学校運営および高大接続のために尽力した。平成 28 年 12 月に岐阜県立多治見高等学校で本学教員を講師とする大学模擬講義に医学部（医療技術）を代表して参加し、資質と意欲のある学生の獲得のために尽力した。

近藤高明教授は、平成 14 年から愛知県犬山市での「健康プラン推進委員会」の委員として地域の健康増進活動に学術専門家として協力してきたが、平成 28 年度は犬山市の健康寿命の算定を行った。8 月下旬に北海道八雲町で 3 日間実施された「町民ドック」は多くの大学と町の共同で疫学調査を兼ねた事業であり、スタッフの一員として 2 名の大学院生とともに参加し、その成果を町民の予防活動に還元するよう努め、9 月には町で開催された説明会と講演会での講師を担当した。1 月には愛知県職員で脂質異常症の疑いを指摘された健診受診者を対象に、教育講演を行った。また、名古屋大学早期予防医療創成センター教授を兼任し、トヨタ自動車の支援をうけて豊田市とともに立ち上げた「豊田健康ナビゲーター倶楽部」の運営活動に参加した。また、厚労省が推進している健康保険組合主体の「データヘルス事業」の一つに山田純生教授（理学療法学講座）とともに参加し、企業従業員の健康推進活動を支援した。

石川哲也教授は、日本内科学会東海支部評議員、日本消化器病学会東海支部評議員、日本肝臓学会西部会評議員として学会活動の活性化に尽力した。また、第 39 回東海薬物治療研究会（名古屋）において、主に薬剤師を対象に「C 型肝炎ウイルスの構造と複製および病原性発現機構」について講演し、肝炎診療に関する啓発活動に貢献した。

川部勤教授は、日本免疫学会評議員、日本職業・環境アレルギー学会評議員、日本臨床検査学教育学会評議員ならびに教員研修委員、日本内科学会東海支部評議員、日本呼吸器学会東海支部評議員、日本呼吸器内視鏡学会中部支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。また、松島充代子講師とともに名古屋大学大学院工学研究科西澤典彦教授と OCT による肺組織の観察システムの開発について共同研究を継続して行った。

川部勤教授は、平成 29 年 3 月に第 25 回名古屋呼吸器領域卒後専門教育セミナーの

プログラム委員としてセミナーを企画実行した。また、川部勤教授は、日本アレルギー学会・日本アレルギー協会「災害時のアレルギー疾患対策対応・支援活動」災害対策副責任者(東海)として東海地区の災害対策に責任を持ち、日本アレルギー協会理事、東海支部支部長・編集委員として第23回アレルギー週間事業「市民公開講座と相談会」を平成29年2月に東海支部事務局代表の松島充代子講師と共に主催した。

さらに、川部勤教授は、東海喘息研究会をはじめとする研究会の世話人として呼吸器・アレルギー疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化、啓発活動の推進に尽力し、平成23年より特定非営利活動法人 中日本呼吸器臨床研究機構の監事、また特定非営利活動法人 愛知県 COPD ネットワークの監事として機構の運営に関わり、地域医療への活動、情報提供、啓発活動を行った。また、川部勤教授は名城大学名古屋ドーム前キャンパスの校医として学校保健事業にも参加している。

長坂徹郎教授は、5月29日には国際細胞学会議において卵巣癌の細胞診に関するシンポジウムにおいて漿液性腺癌に関する講演を行った。6月11日には、日本臨床細胞学会東海連合会の幹事として細胞診基礎講習会の講師を担当し、子宮内膜、卵巣の細胞診に関する教育講演を行った。また、日本病理学会、国立がんセンターがん対策情報センター病理コンサルタントの委託を受け、婦人科領域の病理診断コンサルテーションを行ってきた。

形態情報解析学部門(長坂徹郎教授、川井久美准教授、橋本克訓助教)は、東海がんプロフェッショナル養成基盤推進プランの後援を受けて、名古屋大学細胞診セミナーを開催した。本セミナーは、卒後教育の一環、細胞診の診断精度の向上を目的として平成25年度より開催している。平成28年度は第12回目の名古屋大学細胞診セミナーを平成29年3月5日に開催した。「液状化検体細胞診(LBC)」をテーマとして、2名の講師を招聘し鏡検実習と講演を行い、57名が受講した。

平山正昭准教授は、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授を兼任している。全国学会として、日本神経学会、日本自律神経学会、日本末梢神経学会の評議委員を行っている。地域ボランティアとして、日本パーキンソン病友の会愛知県支部の顧問を務め、年4回の地域講演活動、友の会会員旅行、2ヶ月に1回の会報の執筆を継続して行っている。企業協力として、ヤクルト中央研究所とパーキンソン病患者の腸内細菌の共同研究、Miz株式会社との水素ガスによる臭覚改善効果の共同研究、日内変動を伴うパーキンソン病における皮膚ガスならびに汗、東京堂大学薬学部血液のL-Dopa・L-Dopa代謝産物・揮発性ガス測定をピコデバイス社及び東京大学薬学系研究科角田誠講師と共同研究を行っている。患者団体が主催する日本パーキンソン病コングレスの開催の運営に参加している。

高木明准教授は、東海 KOAG 研究会代表幹事として東海 KOAG 研究会を 2 回（平成 28 年 4 月 14 日）（平成 28 年 9 月 15 日）主催し血液検査部門に従事する臨床検査技師の卒後教育に尽力した。

川村久美子准教授は、平成 27 年度採択「在宅医療患者等における多剤耐性菌の分離率及び分子疫学解析（代表 名古屋大学大学院医学系研究科 分子病原細菌学教授 荒川宜親）」に分担研究者として参画し、愛知県下の特別養護老人ホームや高齢者介護老人保健施設の入所者を対象に薬剤耐性菌の保菌率を調査した。この調査は、在宅患者が薬剤耐性菌の温床になり得るか否かを解析するための国内初のパイロットスタディであり、在宅患者受け入れの際の急性期病院の感染対策に調査結果を還元できるよう尽力した。また、名古屋大学予防早期医療創成センターに准教授（兼任）として参画しており、産学官の連携および融合研究の発展に尽力した。

上山純准教授は、日本衛生学会評議員と日本医用マスペクトル学会評議員として学会運営に協力した。日本産業性学会の許容濃度委員会にて臨時起案委員として招集され、農薬の許容濃度に関する取りまとめに尽力した。名古屋第二赤十字病院における治験審査委員会にて、外部委員として審議に参加した。愛知県ペストコントロール協会の特殊健康診断に殺虫剤ばく露評価を採用し、その尿中殺虫剤代謝物分析の実施に貢献した。

橋本克訓助教は、愛知県臨床検査技師会・病理細胞検査研究班の班員として活動し、病理・細胞検査部門に従事する臨床検査技師の卒後教育に尽力した。平成 28 年 10 月 16 日に同研究班主催の基礎講座（テーマ：乳腺の病理細胞検査学の基礎を学ぶ）を大幸キャンパスで開催し、実務委員を務めた。11 月 23 日には日本臨床衛生技師会と愛知県臨床検査技師会が主催する「検査と健康展」に実務委員として参加し、臨床検査の啓蒙活動を行った。また、愛知県臨床検査技師会において、平成 26 年度より病理検査の精度管理を担当しており、平成 28 年度は Hematoxylin Eosin 染色の染色サーベイおよびフォトサーベイの実務委員を務めた。

（主任：永田 浩三）

リハビリテーション療法学専攻 理学療法学講座・理学療法学専攻（平成28年度）

理学療法学は、身体組織および機能の障害、あるいは能力低下を持ちながらも、質の高い人生を送るために不可欠なリハビリテーション医療に関する研究推進ならびに高度専門教育を行う。そのために、障害の原因となる病態や機能障害の発生機序を生理学的に解明する基礎研究とともに、障害の効果的回復や機能維持、更には疾病・障害の再発予防に関する臨床研究を積極的に推進し、質の高い理学療法の基盤を創造する。また、学内他専攻はもとより、他大学ならびに海外の学術・研究チームと積極的に交流し、国際的水準で研究推進ならびに後進の指導を行い得る人材の育成に努めるものである。

1. 運営

本専攻は、2012年度から大学院の重点化に伴い、リハビリテーション療法学専攻理学療法学講座として組織されている。運営は、全教員（総数9名）による講座会議（毎週水曜日12時から開催）における協議・決定にしがい進められている。さらに、同じ専攻である作業療法学講座と合同の大学院会議（毎月第1,3水曜日）を行っている。人事では、李前助教（現准教授）の後任として井上（平川）倫恵助教が4月1日（土）付けで着任した。

2. 教育活動

学生については、学部においては理学療法学専攻の名称が用いられる。大学院博士前期課程では理学療法学分野、大学院博士後期課程はリハビリテーション療法学専攻が理学療法学領域と作業療法学領域を併せて一講座としているため、便宜上、理学療法学関係と記述している。

○平成28年度の具体的活動内容

学部生としては、4月に保健学科理学療法学専攻第19期生として22名の学部学生を迎え入れた。性別では、男子学生11名、女子学生11名であった。選抜方法による内訳は、推薦入学7名、前期日程試験入学15名であった。また、2年次編入に合格した学生3名が加わった。大学院には、前期課程に9名（一般選抜8名）、後期課程3名（一般選抜2名）が入学した。こうして、理学療法学専攻としての学生数は、1年生22名、2年生25名、3年生24名、4年生25名、大学院博士前期課程リハビリテーション療法学専攻理学療法学分野の1年生9名（一般選抜8名）、2年生8名（一般選抜6名）、後期課程のリハビリテーション療法学専攻理学療法学分野は1年生3

名(一般選抜2名), 2年生1名(一般選抜0名), 3年生3名(一般選抜0名)となった。

新学期には, 4月3日(日)午前中に新入生, 編入2年生に対する全体ガイダンス, 午後からは作業療法学専攻とともに新入生, 編入2年生に対する教務および学生生活ガイダンスを行った。ここでは, 作業療法学専攻と共同で, 全教員との顔合わせも行った。4月6日(水)には新大学院生を対象とした全体ガイダンス, 情報関係ガイダンスに続いて, リハビリテーション療法学専攻によるガイダンス, 在校生ボランティアからの説明等があった。4月5日(火)午前中には入学式が行われた。4月8日(金)には2-4年生を対象とした在校生ガイダンスを行った。この在校生ガイダンスでは, 共通科目については理学療法学・作業療法学両専攻合同で, 専門科目については理学療法学専攻単独で, 各学年別に1時間ずつを使い, 本年度のカリキュラムの説明, 学生生活のルールの再確認を行った。これらにより, 本専攻に所属する学部学生, 大学院生のすべてに対して, カリキュラムの説明, 学生生活のルールの説明・再確認がおこなわれた。説明は主任, 教育・FD委員, 学生生活委員, 授業担当教員が担当した。

4月9日(土)には, 専攻内での新入生歓迎会を行った。新2年生が幹事となり, 土曜日半日を使い, 在校生, 新入生, 教員が参加し, 全員の自己紹介, 懇親会(大幸厚生会館)を通じて人間的交流・連携の強化を達成した。

4月中旬から臨床実習Ⅱ, Ⅲが始まる4年生に対し, 各教員が臨床実習に必要な項目についての学内実習をおこない, 4月25日(月)から実際の医療機関での臨床実習が始まった。この実習は, 各種疾患を観察し, 臨床実習指導者のもとに基本的評価および理学療法プログラムの作成を目的としている。学生は, 多くの不安を抱きながら実習先に向かったが, 5週ごとの反省会で, 種々の問題点などが指摘されながらも, 全員無事この実習を終えることが出来た。5年前から開始した臨床実習前の学内実習もあって, 各学生とも実りの多い臨床実習を経験できたものと思われた。臨床実習は, 7月8日(金)に終了した。4年生は7月11日(月)に臨床実習反省会を行い, 7月13日(水)に理学療法セミナーⅡの一部として, 実習で担当した患者様の症例報告会を行った。理学療法セミナーⅡはさらに吸引療法の理論と実際について, 非常勤講師とともに看護学専攻教員, 理学療法学専攻教員らがそれぞれ担当して行った。

また, 4年生を対象として地域理学療法学実習が5月31日(火)~6月2日(木), 7月15日(金)~25日(月)の期間, 3つのグループに分かれて行われた。地域理学療法学実習は, デイサービスおよび訪問理学療法の実際を見学できる貴重な実習である。

夏季の集中実習として8月8日~8月9日の2日間, 病態人体解剖実習が行われた。これには医学部主催の人体解剖トレーニングセミナーで解剖されたご遺体が提供された。学生にとっては人体構造と機能の理解を深めるとともに, ご遺体に対する感謝の念を通して人の命の尊厳を考

え、将来の医療人としてのあり方を考える良い機会となった。

平成 29 年度 2 年次編入学試験は 8 月 25 日（木）、大学院博士前期課程入学試験は 8 月 23 日（火）、同後期課程入試は 8 月 24 日（水）にそれぞれ実施し、リハビリテーション療法学専攻博士前期課程理学療法学分野に 11 名（一般選抜 10 名、社会人特別選抜 1 名）、博士後期課程理学療法学講座に 4 名（一般選抜 1 名、社会人特別選抜 3 名）が合格した。

9 月 28 日（水）には、博士後期課程の論文発表会（予備審査会）が本館第 3 講義室で行われ、理学療法学講座からは 2 名の学生が発表した。

学年を超えた学生間、学生と教員が密に交流する機会として、9 月 25 日（日）から 1 泊 2 日の日程で岐阜県多治見市の文化施設「地球村」へ出かけて講演会、親睦会、バーベキューを楽しんだ。これには教員・学生合わせて約 66 名が参加し、専攻の絆を深めた。

第 7 回目となる韓国 延世大学との学術交流会が企画され、開催地である名古屋大学大幸キャンパスにて、11 月 3 日（木）から 6 日間にわたって学術交流と親睦を深めることができた。また、11 月 6 日（日）～13 日（日）にかけて、本学の大学院生 2 名が延世大学原州キャンパスに赴き、学術研修や国際交流を図る機会をもった。

後期授業では 4 年生の卒業研究の後半部分が再開され、11 月 30 日（水）に本館第 1 講義室において最終発表会が開催された。22 題の発表があり、教員ならびに在學生との活発な討論が交わされた。1, 2 年生にとっては将来の自身の研究の参考になったと思われる。また、3 年生の卒業研究中間発表会は、平成 29 年 3 月 10 日（金）に本館第 1 講義室で行われた。合計 22 題の発表があり、1, 2 年生からの質問も多く、活発な発表会となった。

大学院では、9 月 28 日（水）に博士後期課程 3 年生 2 名を対象に、本館第 3 講義室で予備審査会を開催した。また、平成 29 年 2 月 9 日（木）に作業療法学専攻を含むリハビリテーション療法学専攻理学療法分野（博士前期課程）13 期生の修士論文ならびに博士後期課程博士論文発表会が行われ、理学療法分野から前期課程 8 題、後期課程 0 題、合計 8 題の発表があった。また、3 月 8 日（水）には前期課程 1 年生（15 期生）の中間報告会が行われ、理学療法分野から 9 題の発表があった。博士前期課程修了者は 8 名で、病院就職 7 名、博士後期課程進学者 1 名であった。博士後期課程満期退学者 1 名が、学位を取得した。

2 月 26 日（日）には理学療法士国家試験が施行され、本専攻学部平成 28 年度卒業生 20 名が受験した。3 月 27 日（月）には保健学科第 16 期生の卒業式が執り行われた。本専攻は編入学生を含め 21 名の新卒業者を世に送り出した。そのうち 10 名が病院に就職し、10 名が大学院（そ

のうち1名が他大学)へ進学した。

3月4日(土)には、平成30年度大学院入学者のための大学院説明会が開催され、理学療法学講座説明会には、学生17名、社会人5名、合計22名が参加した。

3. 研究活動

各教員の研究テーマは、以下のとおりである。

- 鈴木 重行教授 : 筋ストレッチングの効果に関する研究, 骨盤底筋群に対する理学療法効果, 作業関連性筋骨格系障害のメカニズム検証, 培養筋細胞を用いたカヘキシーに関する研究
- 山田 純生教授 : 心不全のリハビリテーション介入, 電気刺激による骨格筋分解抑制, フィットネスと疾病・障害予防
- 内山 靖教授 : 姿勢・運動の制御と運動学習に関する研究, 症候障害学, 理学療法学教育に関する実践的研究
- 亀高 諭教授 : 筋芽細胞の膜融合過程の調節機構, 遺伝性痙性対麻痺の原因遺伝子群 (SPG 遺伝子群) の機能解析, 筋分化におけるオートファジーの役割
- 杉浦 英志教授 : がん悪液質による二次性サルコペニアの疫学的研究, 骨軟部腫瘍の術後再建術についての研究, ロコモ・フレイル・サルコペニアのレジストリ研究
- 石田 和人准教授 : 脳出血モデル動物における中枢神経の病理変化と運動療法の効果に関する研究, 運動による脳梗塞障害予防効果に関する基礎的研究, 抑うつモデルの確立および理学療法効果の検証
- 李 佐知子准教授 : 脳血管障害後の痙性発症メカニズムの研究, 大脳皮質損傷後の運動機能回復メカニズムの研究
- 野瀧 一平助教 : ヒトを対象とした運動学習に伴う脳の可塑的変化の研究およびその臨床応用研究

井上 倫恵助教 : 骨盤底機能障害に対するリハビリテーションに関する研究

4. 対外的な、または社会と関わりのある活動

臨床実習指導者連絡協議会（スーパーバイザー会議）が7月27日（水）に行われた。内容は、臨床実習全般（理学療法イントロダクション、同コミュニケーション、臨床実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）についての報告と反省、臨床実習前の学内実習である基本的臨床技能実習（OSCE）試験の実際とその学習効果、さらに臨床実習Ⅱ、Ⅲについて本学の理念や目的と実習施設における実習目的との差などについて協議した。更に、後期より始まる臨床実習Ⅰ、理学療法コミュニケーション、同イントロダクションについて協議した。

専攻代表が出席した学外関係会議は、第19回国立大学理学療法士・作業療法士教育施設協議会（9月15日（木）、担当：長崎大学）であった。

毎年夏に催される名古屋大学・大学説明会（オープンキャンパス）は8月10日（水）に行われた。保健学科は大幸キャンパスを主会場とし、参加した高校生に保健学科全体の説明がなされた後、各専攻に分かれ、本専攻の特徴などについて主任の内山教授が説明した。本専攻の説明会には208名が参加し、教員と学生が施設を案内し、質問に答えた。質問も多く、高校生の興味の深さがうかがわれた。

10月28日（金）には地震防災訓練が行われ、保健学科全体で、教職員、学生が多数参加した。

（主任：内山 靖）

リハビリテーション療法学専攻 作業療法学講座・作業療法学専攻（平成28年度）

作業療法学講座および作業療法学専攻(以下、「本講座」)は、作業療法に関する学問的体系の確立と高度専門職業人の育成、および教育者、研究者の育成を目的として設置された。

本専攻は、作業療法士専門職教員と医師教員から構成され、それぞれの専門を活かした教育・研究活動を通して作業療法学の発展に努めている。

作業療法学における脳機能とヒトの行為との関係や援助技術の開発、地域生活に密着した臨床研究、作業療法学の専門性を活かした教員と取り組む卒業研究や短期海外研修を通し、高度な専門性と国際性を身につけた作業療法士の育成を推進している。

また、大学院教育において保健・医療・福祉の領域に大きく貢献出来る研究力と、作業療法学における高度専門技術を獲得するための研究活動を積極的に推進している。

1. 運営

平成28年度の本講座は、千島教授（主任）ほか3名の教授(内、飯高教授は平成28年4月に着任。)、准教授3名、講師1名、助教1名の計9名の専任教員により構成されている。本講座の年度運営は、全教員が参加する専攻会議（毎週水曜日開催）によって教育および研究活動の具体的な年次進行に沿った活動方針を決定している。本会議では、名古屋大学の学年歴および保健学科の諸行事に合わせた年間行事、事業についての計画とその進行状況の確認をはじめとして、年度専攻予算に関する事案、学生の教育に関する事案（成績関連、単位認定、進級関連、国家試験関連、卒後進路など）、学部学生生活に関する事案、臨床実習に関する事案（実習計画、臨床実習施設との連携および実習施設指導者会議運営など）、その他保健学科全体の諸課題についての講座としての方針や考え方を討議決定している。特に個々の学生への対応など、具体的な課題について詳細な検討や課題解決への方策を決定している。

また、人事など教授専任事項については随時、講座教授会議にて審議している。本会議は、構成メンバー全員の意見の一致を原則として運営されている。

リハビリテーション療法学専攻で密な連携関係にある理学療法学講座と共に毎月両講座会議（毎週第1・第3水曜日開催）を設け、作業療法学講座・理学療法学講座の全教員が参加し、共通する課題検討に取り組み、連携・協力を図っている。

大学院運営の機構としては、作業療法講座は理学療法講座とともにリハビリテーション療法学専攻の会議を月に1回定例で開いている。

2. 平成 28 年度大学院，学部の教育活動

作業療法学専攻の平成 28 年度入学部学生は，20 名。選抜方法による内訳は，推薦入試で入学した学生は 9 名，前期日程試験で入学した学生は 11 名。性別では男子学生 6 名，女子学生 14 名であった。また，平成 19 年度より募集を開始している 2 年次編入学生はなかった。

平成 28 年度の大学院博士課程前期課程作業療法学講座には 4 名。性別では男子学生 2 名，女子学生 2 名が入学した。内訳は，一般選抜による入学生は 4 名で社会人特別選抜による入学生 0 名であった。

また，平成 28 年度の博士課程後期課程作業療法学講座には 4 名。性別では男子学生 2 名，女子学生 2 名が入学した。内訳は，一般選抜による入学生は 2 名，社会人特別選抜による入学生 2 名であった。

1) 平成 26 年 4 月 5 日の入学式以後：学部新入生・編入生および大学院新入生のガイダンスを実施している。毎年度始めには新入生および編入生のみならず在校生各学年別に年度当初ガイダンスを実施し，当該年度における教育内容，学生生活に関する説明と確認を行っている。近年では，大学生活における安全衛生に関する諸注意，大学生として守るべき個人情報に関する注意など，情報化社会に対応した諸注意が重要であり，この点にも留意したガイダンスとなるよう努めている。大学における学修と生活の基本的内容については作業療法学講座および理学療法学講座が合同で行い，個別の内容について講座別にガイダンスを行っている。この時期 4 年生については臨床実習が既に始まっているために，ガイダンスは前年度末までに実施している。

2) 平成 27 年 4 月 16 日（土）・17 日（日）：通称「犬山ガイダンス」は，一泊二日の日程で行われる学部新入生・在校生合同（臨床実習に参加している学部 4 年生を除く。）の年度当初ガイダンスである。本年度も昨年と同様に愛知県犬山市犬山国際ユースホテルで開催された。全教員，新入生，新 2 年生，新 3 年生が集合し，教員紹介・学生紹介の後，専攻ガイダンスを行った。新入の学部学生が円滑に快適で充実した学生生活を送るという目的で開催され，全教員や 2 年生 3 年生の先輩からの公私的な示唆や助言などを通して実施された。夕食後新 2 年生を中心とした親睦会が行われた。同時に学年相互の交流・親睦を目的として種々のイベントを開催した。新 2 年生が編纂する小冊子が配布され，作業療法学専攻に関わる教員と学生間での親睦に活用された。

3) 平成 28 年 4 月 4 日（月）から 8 月 12 日（金）：4 年生臨床実習の実施。学部 4 年生を対象とし最終年次前期期間中，学内外の臨床施設（名古屋大学医学部附属病院を含め 64 施設）にて臨床実習を行った。実習期間を 3 期に分けて臨床実習 I（身体障害

分野), 臨床実習Ⅱ(精神障害分野), 臨床実習Ⅲ(発達障害分野および老年期障害分野)の医療機関・施設で臨床実習を行った。Ⅰ期:4月4日(月)から5月13日(金)に実施。臨床実習セミナーを5月16・17・18日に実施。Ⅱ期:5月23日(月)から7月1日(金)に実施。Ⅲ期:7月4日(月)から8月11日(木)に実施。最終臨床実習発表会を8月12日(金)に実施した。4年生の学外臨床実習に際しては,各施設に担当教員を配置し,実習学生の学修状況や体調,実習の進捗状況を把握するように努めた。学生の実習進捗状況はメールおよび毎週の会議で報告され,問題の生じた事例については,全教員で検討し,指導教員,実習担当教授,施設担当教員,実習担当教員が対応に努めた。

4)平成28年6月29日(水):大学院博士後期課程2年次中間発表会。リハビリテーション療法学専攻2年生に在籍する大学院生5名(内,作業療法学講座4名)が研究テーマについての進捗状況を報告した。研究発表会では,今後の研究方針について教員からアドバイスがなされた。

5)平成28年8月10日(水):大幸キャンパス・オープンキャンパス開催。本キャンパスにおいて,保健学科全体では大学教育理念,大学院,アドミッションポリシーなどを,専攻別説明会では学内の作業療法学専攻関連施設を小グループに分割してツアー形式での説明会を実施した。説明会参加者に対して講義室や実習室等を案内し,本学における本専攻の教育理念,方針,具体的教育内容について教員より説明した。午前57名(昨年88名),午後26名(昨年41名)の参加があった。保健学科全体では総参加者932名であり,愛知県・岐阜県・静岡県からの参加者が8割を占めた。本年度も保護者からの参加希望があった。次年度の開催は8月10日(木)で,本年度と同様に午前・午後の2回実施の予定である。

6)平成28年8月29日(火):学部2年次編入生入学試験。

7)平成28年8月30日(水):大学院博士課程前期課程入学試験。

8)平成28年8月31日(木):大学院博士課程後期課程入学試験。

9)平成28年9月14日(水):卒業研究中間発表会(学部4年生21名)。卒業研究の途中経過の報告と教員による指導の機会として実施された。

10)平成28年9月20日~30日:作業療法入門実習(学部1年生24名)。本専攻に入学してから最初の臨床場面に同席する実習となる。作業療法における主要な分野(身体

障害分野，精神障害分野，発達障害分野，老年期障害分野）の関連の機関・施設 6ヶ所の見学を中心とした実習を実施した。

- 11) 平成 28 年 9 月 14～12 月 11 日：作業療法基礎学実習（学部 2 年生 21 名）。作業療法の対象となる施設や対象者を理解する目的で 2 年後期に実施している。学生は，身体障害分野，精神障害分野，発達障害分野及び老年期分野の 4 領域の医療機関・施設のうち 3 か所で基礎学実習を実施した。学生 1 人あたり 1 か所の実習は 3 日間とした。
- 12) 平成 28 年 12 月 9 日（土）：卒業研究発表会（学部 4 年生 21 名）。卒業研究の最終発表会であり，続いて論文の作成が行われた。研究発表会の内容は，卒業研究論文集として発刊した。
- 13) 平成 29 年 2 月 6 日（月）：学部の推薦入学試験。
- 14) 平成 29 年 2 月 9 日（金）：大学院博士課程前期課程および後期課程学位論文発表会。本講座からは博士課程前期課程 6 名，博士課程後期課程 1 名が発表を行った。
- 15) 平成 29 年 2 月 15 日（水）：OSCE（客観的臨床能力試験）の実施。学部 4 年生（21 名）を対象に実施した。
- 16) 平成 29 年 2 月 16 日（木）：臨床実習指導者会議。4 年次に行われる臨床実習での実習協力施設の実習指導者を招いて，臨床実習指導者会議を開催した。議題は主として平成 27 年度臨床実習報告，29 年度実習計画について，大学からの各臨床実習の到達目標設定と学生評価，長期の臨床実習に発展させる上での基礎学実習の重要性と進め方を説明し，教員と実習指導とのディスカッションを行った。
- 17) 平成 29 年 2 月 25（土）・26 日（日）：一般選抜前期日程入学試験。
- 18) 平成 29 年 2 月 26 日（日）：理学療法士・作業療法士国家試験。本専攻から卒業予定者 20 名が受験した。
- 19) 平成 29 年 3 月 4 日（土）：大学院説明会開催。一般学生 18 名，社会人 2 名（計 20 名）が参加した。
- 20) 平成 29 年 3 月 8 日（水）：博士課程前期課程中間発表会。前期課程 1 年在籍の 14 名（内作業療法学専攻 5 名）が研究の進捗状況を報告した。

- 21) 平成 29 年 3 月 27 日 (月) : 学部および大学院卒業式。本年度は学部学生 21 名 (男性 7 名, 女性 14 名) が卒業した。大学院リハビリテーション療法学専攻作業療法学講座では修士号 6 名 (男性 3 名, 女性 3 名), 博士号 1 名 (男性 1 名) の取得があった。
- 22) 平成 29 年 3 月 29 日 (水) : 理学療法士作業療法士国家試験合格発表。本専攻 20 名が合格, 1 名が不合格であった。

3. 国際交流

- 1) 平成 28 年 11 月 2 日 (水) から 9 日 (水) : 平成 28 年度名古屋-延世大学学術研究交流事業として, 「2016 Yonsei-Nagoya University, Research Exchange Meetings in Health Sciences & Nursing」が開催された。韓国 延世大学作業療法学大学より専任教員 1 名, 修士大学院生 5 名 (M1 : 3 名, M2 : 2 名) が訪名され開催された。両作業療法学専攻の教員が 4 セッションの発表座長を分担して進行し, 両学それぞれ 5 名の参加学生が研究成果を発表した。発表会場は多数の本学作業療法大学院学生と専任教員の参加があり, 積極的な質疑応答がなされた (別途 抄録集を編纂・発刊)。滞在期間を通じて本学大学院生が中心となり, 各研究室訪問, 学内見学, 名古屋市内紹介等を計画し, 積極的な交流事業が展開された。
- 2) 平成 28 年 2 月 24 日 (金) から 3 月 2 日 (木) : 平成 28 年度名古屋-延世大学学術研究交流事業として, 作業療法学専攻の 2 名の修士大学院生 (M1 : 1 名, M2 : 1 名) が延世大学を訪問した。28 日 (木), 「OT Global Exchange program」が原州キャンパスにおいて開催された。米国 南カルフォルニア大学, 米国 ユタ州ウィーバー大学両校を交えた作業療法研究報告会において本学 2 名の大学院生が発表した。帰国後, 3 月 17 日 (金) に延世大学訪問合同報告会が大幸キャンパスにて開催され, 訪朝した学生より訪問報告がされた。

4. 研究活動

本講座では作業療法各分野および基礎的研究各分野における研究が大学院教育とともに行われている。研究は教員による個人研究が中心であるが, 企業や他施設との共同研究も行われている。

4-1 共同研究

- 1) 厚生労働省難治性疾患克服事業（スモン患者の QOL に関する研究：寶珠山・清水・上村・星野）
- 2) 厚生労働省科学研究事業（複合性局所疼痛症候群の評価に関する研究（寶珠山）
- 3) 日本語入力 BCI システムの臨床応用の研究（工学研究科）（寶珠山）
- 4) てんかん患者における脳磁図及び脳画像解析（医学系研究科・小児科，脳神経外科）（寶珠山）
- 5) 手の外科領域における感覚障害と疼痛緩和効果に関する研究（医学系研究科・手の外科，リハビリテーション部）（寶珠山）
- 6) ASD 児の情動的コミュニケーションを基盤にした作業療法の効果についての研究（花ノ木医療福祉センター）（辛島）
- 7) 中高年者の高次脳機能に関する長期縦断的資料を基盤とする神経心理学的研究（関西福祉科学大学）（伊藤）
- 8) 脳卒中患者の自動車運転再開に関する研究（公益財団法人丹後中央病院）（伊藤）
- 9) 高次脳機能障害者の実車運転における行動特徴に関する研究（名古屋市総合リハビリテーションセンター）（伊藤）
- 10) 革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト（医学系研究科，精神医学）（飯高）
- 11) 相互主体性の解析に基づく社会行動の神経基盤と発達過程の解明（生理学研究所）（飯高）
- 12) 脳・生活・人生の統合失調症的理解にもとづく思春期からの主体価値発展学（東京大学その他）（飯高）
- 13) Resting State fMRI と脳波の同時計測によるケア手法の有効性検証プロトコルの開発（長寿医療研究センター）（飯高）
- 14) 脳機能データ解析用ソフトウェアの開発（メディカル・トライ・システム社）（飯高）
- 15) 摂食障害患者に対するリハビリテーションの開発とその効果検証に関する研究（医学系研究科精神医学・医学部附属病院リハビリテーション部）（星野）
- 16) 外来統合失調症患者に対する認知リハビリテーションの効果検証（医学系研究科精神医学・医学部附属病院リハビリテーション部）（星野）
- 17) うつ病女性に対するリハビリテーションの開発（愛知医科大学・愛知淑徳大学）（星野）
- 18) 統合失調症患者の時間使用に関する研究（医学部附属病院リハビリテーション部・楠メンタルホスピタル・北勢病院・心療センターひなが・松蔭病院・北津島病院・榊原病院）（星野）

4-2 個人研究

- 1) 自閉症スペクトラム児の情動的コミュニケーションを基盤とした作業療法の効果 (辛島)
- 2) 特別支援教育・作業療法士と教員のための環境因子観察表の開発 (辛島)
- 3) 社会脳に関する fMRI 研究 (飯高)
- 4) 扁桃体と顔認知の脳画像研究 (飯高)
- 5) 安静時 fMRI を用いた精神疾患の補助的診断方法の開発 (飯高)
- 6) 精神疾患の脳画像研究 (飯高)
- 7) 運動と体性感覚誘発脳反応に関する研究 (寶珠山)
- 8) 安静時と課題時の脳磁図による脳活動解析 (寶珠山)
- 9) 重度神経疾患 (児) の生活支援に向けた新しい支援技術開発 (千島)
- 10) 脳波応用による生活支援技術に関する研究 (Brain-Computer Interface 研究) (千島)
- 11) ヒトの情報処理機構と運動機能に関わる基礎的研究 (千島)
- 12) 運動学習における関節運動の変化に関する研究 (清水)
- 13) 感覚入力情報の違いが作業効率に及ぼす影響に関する研究 (清水)
- 14) 日常生活活動に及ぼす手指関節の可動域の影響に関する研究 (清水)
- 15) 高齢者の運転行動における自己統制に関する研究 (伊藤)
- 16) 高次脳機能障害者の実車運転評価に関する研究 (伊藤)
- 17) 体性感覚刺激に対する関連脳領域間の機能連関の経時的変化に関する研究 (上村)
- 18) 運動感覚イメージ課題による関連皮質領域ならびに皮質間連絡の賦活に関する研究 (上村)
- 19) 要介護高齢者の活動・参加に関する研究 (上村)
- 20) 作業療法老年期領域における活動・参加の評価法に関する研究 (上村)
- 21) 精神障害者の地域生活支援に関する研究 (星野)
- 22) うつ病女性の育児支援に関する研究 (星野)
- 23) 認知課題と子供の座位姿勢に関する研究 (五十嵐)

4-3 地域・社会活動

- 1) 平成 28 年 4 月～29 年 3 月 (継続) 愛知県作業療法士会機関紙査読委員 (辛島・伊藤・清水)
- 2) 平成 28 年 4 月～29 年 3 月 (継続) 名古屋市教育委員会特別支援教育指導室スーパーバイザー (辛島)

- 3) 平成 28 年 1 月～29 年 12 月 国立大学 PT, OT 教育施設協議会・理事 (辛島)
- 4) 平成 28 年 12 月～29 年 3 月 (継続) 福祉施設等リハビリテーション関連スタッフ交流会顧問 (辛島)
- 5) 平成 28 年 4 月～30 年 3 月 (継続) 日本作業療法士協会学術誌「作業療法」編集委員 (辛島)
- 6) 平成 28 年 4 月～29 年 (継続) 日本作業療法士協会 演題審査委員 (千島)
- 7) 平成 28 年 4 月～29 年 (継続) 日本作業療法士協会 事務局特設 協会史料編纂委員会 (千島)
- 8) 平成 28 年 4 月～29 年 (継続) 日本作業療法士協会 事務局 統計情報委員会委員長 (千島)
- 9) 平成 28 年 4 月～29 年 (継続) 日本作業療法士協会 教育部・生涯教育委員会・専門作業療法士審査班：福祉機器 審査班員 (千島)
- 10) 平成 28 年 4 月～29 年 3 月 (継続) 名古屋市介護保険認定審査会 (伊藤・清水・上村)
- 11) 平成 28 年 4 月～29 年 (継続) 日本作業療法士協会 教育部・生涯教育委員会・専門作業療法士制度班 班員 (清水)
- 12) 平成 28 年 4 月～29 年 3 月 (継続) 愛知県作業療法士会機関紙編集委員 (清水)
- 13) 平成 28 年 4 月～29 年 日本作業療法士協会 学術部疾患別ガイドライン班班員 (星野)
- 14) 平成 28 年 4 月～29 年 精神疾患と認知機能研究会：M-Cog サテライトセミナー 世話人 (星野)
- 15) 平成 28 年 4 月～平成 29 年 第 17 回東海北陸学会実行委員 (星野)
- 16) 平成 28 年 10 月～12 月 第 1～5 回愛知県作業療法士会現職者共通研修 (五十嵐)

(主任：千島 亮)

平成28年度 市民公開講座

名古屋大学大学院医学系研究科
名古屋大学医学部保健学科

本学は昭和58年以来、大学での研究成果や知的財産を地域の皆様に還元することを目的として、健康や医療に関わるテーマで一般市民の皆様を対象とした公開講座を開催してまいりました。

本年は「高齢者のリハビリテーション～健康寿命をのばそう～」と題して2つの講義を開講いたします。多くの皆様のご来場をお待ちしております。

高齢者のリハビリテーション ～健康寿命をのばそう～

開講日時 ■ 平成28年 10/15 (土) 10:00～12:10

開講場所 ■ 名古屋大学大幸キャンパス 東館4階大講義室

受講料
無料

募集人員 ■ 100名 事前の申し込みが必要です。
※当日直接ご来場された場合でも席に余裕があれば受講いただくことができます。

講座内容

第1講 転ばないことが健康寿命をのばす

10:00

▼

11:00

未曾有の高齢社会に突入している我が国では、転倒によって発生する医療・介護費用は年間9,000億円にも達すると言われております。また、65歳以上の高齢者が要介護になる要因の12%が転倒に関連していると考えられ、長く健康に自立した生活を送るためにも、転倒を予防することが非常に重要になっております。本講座では、高齢者の転倒の予防について、最新の知見を含めて紹介します。

名古屋大学大学院医学系研究科 リハビリテーション療法学専攻・助教 野鳥 一平

第2講 ロコモティブ シンドロームと健康生活

11:10

▼

12:10

運動器の障害によって、移動機能が低下した状態をロコモティブ シンドロームといい、進行すると、要介護となったり、要介護になる危険性が高まった状態になります。本講座では、高齢者がきたしやすい骨粗鬆症や変形性関節症などの運動器疾患とロコモティブ シンドロームとの関連について概説します。また、近年話題になっている災害時におけるエコノミークラス症候群とその予防法についても紹介します。

名古屋大学大学院医学系研究科 リハビリテーション療法学専攻・教授 杉浦 英志

- お申し込み方法 ●はがき、ファクス、または電子メールのいずれかでお申し込みください。
●お申し込みには、[市民公開講座申し込み]と明記のうえ、氏名(フリガナ)及び連絡先を必ず記入してください。
※電子メールの場合、表題を[市民公開講座申し込み]としてください。
●締め切り：10月7日(金) 到着分 ※受講可能な場合、お申し込みへの返信はいたしません。

- お申し込み先 〒461-8673 名古屋市東区大幸南1-1-20
名古屋大学大学院医学系研究科教務学生係
FAX (052) 719-1506
E-mail: ihogakumu@adm.nagoya-u.ac.jp (申込み専用)

- 会場への交通案内 ●名城線「ナゴヤドーム前矢田」駅下車(①番出口)徒歩10分
または、名城線「砂田橋」駅下車(①番出口)徒歩10分
●JRまたは名鉄「大曾根」駅からゆとりーとライン「ナゴヤドーム前矢田」駅下車徒歩5分
●JRまたは名鉄「大曾根」駅から市バス「砂田橋」行き「大幸三丁目」下車すぐ

■その他申

受講申込時に記載された個人情報等は、本公開講座の運営のみに利用させていただきます。また名古屋市に暴風警報が発令され、午前8時までに解除されない場合や災害や感染症の流行等が生じた場合には、公開講座は中止とさせていただきます。その際は、本研究科ホームページ (<http://www.met.nagoya-u.ac.jp/>) 上でお知らせしますので、開講前は特にご注意願います。

後援 愛知県看護協会／愛知県診療放射線技師会／愛知県臨床検査技師会／愛知県理学療法士会／愛知県作業療法士会



平成28年度大学院医学系研究科(保健学)市民公開講座 アンケート集計結果

①性別、②年齢構成

	男	女	その他	計	%
10代	1	2	0	3	3%
20代	2	0	0	2	2%
30代	1	2	0	3	3%
40代	1	4	0	5	6%
50代	2	9	0	11	13%
60代	5	10	0	15	17%
70代	12	16	0	28	32%
80代以上	8	13	0	21	24%
未記入	0	0	0	0	0%
計	32	56	0	88	100%

③職業

	男	女	その他	計	%
学生	1	3	0	4	5%
会社員	4	8	0	12	14%
自営業	2	3	0	5	6%
主婦/主夫	0	24	0	24	27%
無職	22	14	0	36	41%
その他	3	3	0	6	7%
未記入	0	1	0	1	1%
計	32	56	0	88	100%

④本学の卒業生か

	男	女	その他	計	%
はい	4	1	0	5	6%
いいえ	28	55	0	83	94%
未記入	0	0	0	0	0%
計	32	56	0	88	100%

⑤本講座を何で知りましたか(複数回答あり)

	男	女	その他	計	%
新聞、TV	1	5	0	6	6%
区役所	3	8	0	11	12%
生涯学習センター	4	0	0	4	4%
図書館	1	2	0	3	3%
友人情報	3	13	0	16	17%
本学科からの案内	14	18	0	32	34%
ホームページから	4	4	0	8	8%
その他	5	9	0	14	15%
未記入	0	1	0	1	1%
計	35	60	0	95	100%

⑥感想を聞かせてください

	男	女	その他	計	%
役に立った	25	48	0	73	83%
まあ役に立った	7	7	0	14	16%
あまり参考にならなかった	0	0	0	0	0%
その他	0	0	0	0	0%
未記入	0	1	0	1	1%
計	32	56	0	88	100%

⑦実施方法について

A全体の時間について

	計	%
丁度よい	83	94%
長い	3	3%
短い	1	1%
未記入	1	1%
計	88	100%

Bテーマ毎の時間について

	計	%
丁度よい	83	94%
長い	1	1%
短い	1	1%
未記入	3	3%
計	88	100%

C講演形式について

	計	%
講演型式	51	58%
参加型セミナー	20	23%
その他(講演、参加型を半々で)	7	8%
未記入	10	11%
計	88	100%

D【今後希望するテーマ】

- 認知症について(予防に役立つ生活習慣など)
- 健康に関すること(最新の情報など)
- 健康寿命を伸ばす第二弾
- また杉浦先生、野島先生の講義を聞きたい
- ウォーキングなど日常的にできる運動についての知識
- 適切な運動について(運動不足、やり過ぎの見極め等)
- 心の健康講座
- 子どもから高齢者まで、起こりやすい病気に対する分かりやすい症状説明とその対応及び予防
- 健康についての10代20代からの食生活及び運動の重要性
- 老後の過ごし方(加齢に伴う心身の変化への対処)
- 疾病になったとき考えるべきこと、行うべきこと(どんな機関に助けを求めるとよいのか?)
- がん予防、免疫機能を高めるために日常生活でできること
- 笑うことの大切さについて(心身の健康への影響)
- 介護の方法について(注意すべき点など)
- マスメディアからいろんな情報が入ってくるが、何を信じ、実行したらよいのか?
- 高齢者の心の活性化、うつ病予防、閨値下うつからの脱却
- 自己免疫疾患について(仕組みと治療と予防)
- 変形性関節症について(治療と予防)
- 若年層(10~30代)を対象としたテーマ
- 高齢者の社会貢献について
- 身体障害者、認知症患者への接し方
- 口腔ケア 嚥下
- うつ病の対処法(精神科医の傾聴は有効か?)

【感想】

- 県外から参加した甲斐がありました。
- もっとこのような機会を設けてほしい。
- 今回のような講座の情報をもっと発信してほしい。
- 具体的な運動とその有用性を分かりやすく講演していただけてよかった。
- 高齢者にとって重要なテーマを講演してくださいありがとうございました。大変参考になりました。
- 去年に続き今年もとても良い講座でした。教わった運動を出来るだけ継続して実行したいです。
- どちらの講演も丁寧で、高齢者にも分かりやすい説明だった。先生がはっきり、ゆっくり話してくれてとてもよかった。
- 70歳以上を対象にした(高齢者向けの?)今回のような講座を継続してほしい。
- 知っているようで実は知らなかったことを改めて学ぶことができた。とても勉強になりました。
- 大変分かりやすい講義をありがとうございました。教わったことを実行あるのみ、努力します。
- 初めて参加したが、とても有意義でした。
- 講義後の学生さんのサークル紹介をこれからも続けてください。

- 資料、スライドの文字をもっと大きくしてほしい。
- スライドをプリントアウトしたものとよかった。(メモが間に合わなかった、内容がとても良かったので後で復習できるように)
- 学生さんのサークル紹介の説明が少し早く聞き取れないところがあった。
- カタカナ言葉、専門用語についての日本語の補足説明があると嬉しいです。

<まとめ>

本年度の市民公開講座は、リハビリテーション療法学専攻が担当しました。理学療法学講座より、2名の講師を選出し高齢者のリハビリテーションとくに、健康寿命の延伸をテーマとして講演を行いました。

第1講は、「転ばないことが健康寿命をのばす」という演題で、名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学専攻・助教の野嶋一平先生に高齢者の転倒の予防について、最新の知見を含めて講演をして頂きました。

第2講は、筆者が「ロコモティブ シンドロームと健康生活」という演題で、高齢者がきたしやすい骨粗鬆症や変形性関節症などの運動器疾患とロコモティブ シンドロームとの関連、また、近年話題になっている災害時におけるエコノミークラス症候群とその予防法についての講演を致しました。

多くの質問やコメントを頂き、講演後のアンケート調査において役に立ったとの回答が83%、まあ役に立ったとの回答が16%で99%の方に役に立ったとの満足度を得ることができました。参加者の興味の高さが伺えるとともに、非常に充実した講演会であり、有意義な社会貢献活動になり得たと思われま

(平成28年度地域貢献委員会委員長：杉浦 英志)